

## 安積開拓の見聞を礎に、プロレタリア作家となる

宮本百合子(中條ユリ)

宮本百合子は東京生まれだが、祖父中條政恒は安積開拓に心血を注ぎ開拓の父と呼ばれ、晩年開成山で没した人である。

祖母の運が開成山に在住したので、百合子は幼少時代より毎年開成山に滞在した。この開成山での体験が小説『貧しき人々の群』（大正5年）として「中央公論」に発表された。百合子十七歳の時である。また開成山を背景に『禰宜様宮田』『三郎爺』等を描いた。百合子は祖父の安積開拓による近代化が、社会を発展させる一方で貧しい人々を多く生み出している矛盾に気付き、ヒューマンイズムの立場から解決法を追い求めた。アメリカでの恋愛結婚が人間としての自由ではなく束縛となったのを描く『伸子』を経て、社会的人間の解放を求めてプロレタリア文学へ参加した。戦時下の弾圧にも屈せず過ごし、戦後は『播州平野』に郡山を描いた。」（郡山市文学資料館）